

環境特集——まとめ



2019年4月14日、平成最後となる早慶レガッタが隅田川を舞台に開催された。春の風物詩として愛されてきたイベントも88回を数え、今回も早稲田・慶應両校を応援する関係者だけでなく、地元を含め多くの人々が桜の開花が終わった直後の隅田川両岸を埋めた。かつて開催が困難なほど汚れてしまった隅田川は、国、地方自治体、そして民間のさまざまな人々の想いと努力と協力で、春の風物詩を取り戻したのである。

これこそが「環境問題」とそれに呼応する活動の好例ではないだろうか。

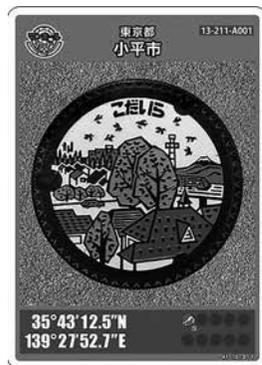
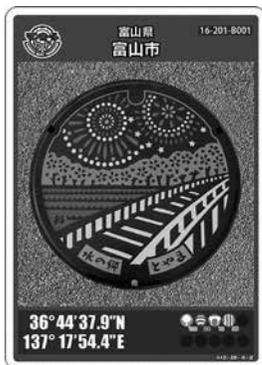
本号で取り上げた「下水道」だけでなく、隅田川というシンボルを囲むあらゆる「人」や「モノ」そして組織が具体的な「隅田川の浄化」というテーマを持ち、事の大小にかかわらずなにかのアクションを起こしたことが生み出した成果である。そのきっかけとなったのは目に見えて黒ずんだ水が濁り、異臭を放つ隅田川の姿であったのは確かである。

一方、今回特集した「下水道」はかつての隅田川のように目に見えて状況が突きつけられるものではなく、まさに地底を走る見えないインフラである。

この下水道事業に早くから着手している地方公共団体では施設の老朽化が進んでいるところもあり、計画的な改築、更新を行う必要がある。つまり下水道は造つたら終りではなく、国土強靱化を進める上でインフラの強化を図りながら適切な管理を進めて行くことが求められているのだ。

下水道の建設から維持管理まで我が国に蓄積されたノウハウは、国内外における成長戦略の柱として下水道界が有する資産・技術・人材を「水ビジネス」展開の戦略資源と捉え、資源・エ

る。



ネルギー再生活用による産業振興やその輸出・国際協力等に貢献するという側面も持ち合わせているのである。

いずれにしても「見えない」インフラをいかに国民に「見える」ようにするのが大きなテーマなのだ。

コレクションのひとつとして全国にファンを生んだ「マンホールカード」はその好例である。日本全国407の自治体が478種類のカードを登録しており、このマンホールカードを収集するためのバスツアーまで開催されるというのだから、マニアの熱狂ぶりがかがえる。残念ながら審査制から登録制になり、コレクターズアイテムとしての希少価値は少し薄れたが、これまで見過ごしてきた足元の鉄のふたに視線を集め、その下にある下水道の存在を多くの人に知らしめたという意味では極めて大きな働きをした。

環境問題とは、日常生活のなかで着目することの少ないさまざまな「都合な真実」により多くの人々の視線を集め、その問題意識を喚起することに他ならない。特集の冒頭で述べたように、いま問題とされている温暖化も公害も絶滅危惧種も、地球という惑星にとっては実に些細なことなのだ。

環境問題を自分自身の問題として意識する。本特集がその契機となれば幸いである。

下水道広報プラットホーム

2010年(平成22年)7月、日本下水道協会に設置された「下水道の真の価値を国民各層に知ってもらおう研究会」が従来の下水道広報のあり方の問題を抽出討議し、実践的な下水道広報案を纏めた提言書において、「時代の変化に下水道広報は追いついていないのではないか」との問題意識から、下水道業界のみならず今後、新たな取り組みを進める上で関わりが想定される他業種や教育関係の委員を招いて議論・検討を重ね「下水道界が一丸となって下水道の多様な価値を再確認し、国民それぞれの層に狙いを定めてお知らせする」ことにより、国民生活と地球環境の永続的な維持向上を確保する道筋が明示され、この提言をスタートライン



「GKP」により、国民生活と地球環境の永続的な維持向上を確保する道筋が明示され、この提言をスタートライン

として、セクターを越えた下水道広報の中枢の一つとなる情報交流、連携の母体として「下水道広報プラットホーム」(GKP)が設置された。

マンホールカード

おそらく、世界広しと言えども、マンホールの蓋に地域や自治体ならではの意匠を施し、いわんや色まで付けるような国は日本ぐらいのものだろう。マンホールの蓋は、世界に誇る日本の文化ともいえるのだ。「GKP」ではこのマンホールの蓋を国民に楽しく伝えるとともに、下水道への理解・関心を深めるべく、全国の地方公共団体とともに発行コレクターズアイテムとしてコミュニケーションツール「マンホールカード」を、提供している。

